

「学ぶ側の論理」を大切にした授業の創造 ～子どもの自己決定を尊重する場の設定を手立てとし

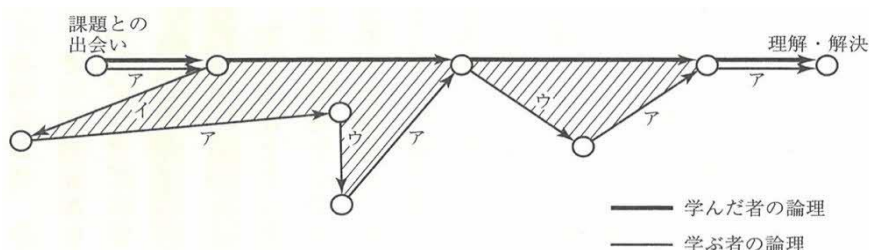
大阪市立豊崎本庄小学校 西浦 博久

1. 研究主題設定の理由

本校では、昨年度「根拠をもとに自分の考えを表現できる子どもの育成」を研究主題に設定し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた実践に取り組んできた。単元を通して主体的に学ぶ子どもの姿が見られた一方で、対話が深まらず、形式的な話し合いになる場面が多く見られたという課題が明らかになった。このような本校の実態は、授業改善は試みてはいるものの、教師自身が、自分本位の授業展開や指導案通りに子どもたちを誘導してしまうような授業展開になっていることを示している。そこで、今年度、本校では授業のあり方、授業の本質を問い直すことからはじめた。そして、「不確実性」「曖昧性」を授業の本質として捉え、子どもの反応、応答から学びの文脈を見取り、教師が適切な介入を行うことを中心とした授業をめざした。そして、今年度の本校の研究主題を「『学ぶ側の論理』を大切にした授業の創造ー子どもの自己決定を尊重する場の設定を手立てとしてー」と設定した。

2. 研究の趣旨

本研究では、授業づくりの際の「教える側（教師）の論理」と「学ぶ側（子ども）の論理」に着目する。



学ぶ者の論理と学んだ者の論理

私たち教師は、これまでに多くの学習経験を積み重ねてきており、その学習経験の延長線上に「教える」ことが可能であると考えてはいないだろうか。このような考えをもとに授業を展開しようとすると、教師自身の理解の仕方をもとに目の前の子どもに教え、教師自身がよく理解できなかった学び方については、避けようとするのではないだろうか。子どもには、それぞれの学び方や理解の仕方がある。その学び方や理解の仕方を大切にし、尊重することによって真の意味での学びが成立するのではないだろうか。つまり、「学ぶ側の論理」を無視し、「学んだ側の論理」を優先した授業展開では、子どもは真に学ぶことができず、資質・能力を育成することもできないということである。一方で、授業における教師と子どもの関係を「学ぶ側の論理」と「学んだ側の論理」といった二項対立関係として捉えることは、教師や子どもにとってよい授業、学びには結びつかない。

本研究では、授業という営みは、材を介した教師と子どものコミュニケーションであると捉えることにする。特に、教師と子どもがともに材について追究していくこと（共同注視）、子どもが探究する問題や自分に合った学びを自己決定していくことを重視する。そうすることで、教師は材に対す

る学ぶ側（子ども）の問いや考えを見取ることができるとともに、教師と子どもが材を介して相互に応答し合う関係が生まれる。さらに、この相互に応答し合う関係が生み出される中で、「葛藤」「矛盾」「対立」が生じることがある。本研究では「葛藤」「矛盾」「対立」を学びのスタートと捉え、授業を展開していく。つまり、本研究における「学ぶ側の論理」を大切にしたい授業とは、教師と子どもが材を介して、相互に応答し合う中で生まれた「葛藤」「矛盾」「対立」を学びのスタートとし、教師が子どもの試行錯誤や自己決定を見守り、尊重しながら授業を展開していくことである。このような授業を展開することにより、子どもの学びがより深いものになると考えた。

3. 研究の概要

研究主題に迫るために以下のような研究の視点を設けた。

① 子どもが主体的に学ぼうとする姿

- ・見通しをもって粘り強く取り組んでいる。
- ・自己の学びを振り返りながら、次の活動や学びにつなげている。
- ・自分のためだけでなく、誰かのために学ぼうとしている。

② 子どもが「聞きたい」「伝えたい」と思える課題を通して他者と対話する姿

- ・自分の考えを伝えたり、他者（人・もの等）の考えを聞いたりして考えを振り返っている。

③ 自ら問いを見出し、考えを広げたり、深めたりする姿

- ・教科の「見方・考え方」を働かせながら、既習内容を関係づけながら問いを見出したり、理解を深めたりしている。

今年度は、以下の2点を具体的な手立てとした。

○ 課題設定の工夫（単元途中での課題の変更もあり）

- ・リアリティのある課題 ・疑似的に体験する学び

○ 子どもが自己決定する場（機会）づくり

- ・学び方の自己決定（いつ・どこで・だれと・何を・なぜ・どのように）

4. 研究の成果と今後の課題

（1）研究の成果

- リアリティのあるテーマや、疑似的に体験する学びを意識した課題設定の工夫を行ったことで、授業の材に対して、児童同士だけでなく、指導者と児童がコミュニケーションをとることができ、児童が今どのように感じているのかや、考えているのかを見取りながら学習を進めることができた。
- 子どもが学びの主体となって、学習に取り組むための自己決定（いつ・どこで・だれと・何を・なぜ・どのように）する場（機会）づくりをすることで、児童自身の学ぶ意欲が高まり、「学ぶ側の論理」を大切にしたい授業の創造につながった。

（2）今後の課題

- 「学ぶ側の論理」を大切にしたい授業づくりをする上での授業時数のマネジメント
- 児童の現状を正確に把握する視点、つまり、児童の状態や学びのプロセスを継続的に記録、分析する方法の整備
- 「学ぶ側の論理」に立った、真に子どもと応答する関係の構築